僕の視線

森田　圭

僕の病気は『顔面甲肩上腕型筋ジストロフィー』だ。体に異変を感じて病院に行き、この病気と診断されたのは僕が一二歳の時。この病気は遺伝子の異常で、筋肉の細胞がどんどん衰えていくもので、僕の場合は遺伝性という事だった。その頃の僕は、皆と何も変わらない元気な小学生だった。そしてあれから一七年。今の僕はもう立って歩く事は出来ない。だから、僕の視線は自分の身長より遥かに低い位置にある。皆と同じ様に立っていた頃に見えていた景色、車椅子に乗ってこそ見える景色。この病気になってから、僕はあらゆる景色を見て来たんだ。

僕がまだ小さかった頃、「この子は変な笑い方をする」母がそう言った。僕の笑顔は何だかひきつった様な表情だったらしい。あの頃まだ家族の誰もが僕が難病を抱えている事に気付いてはいなかった。

僕の家族は、両親と四つ下の弟の四人家族。だが、今は四年前に父が他界し、弟も四年前に結婚し家を出た為、今は母と二人で暮らしている。

一七年前、小学生だった僕の体に少しずつ異変が起こり始める。何も無く過ごしていたある日の事、体育の時間に行った跳び箱で、ジャンプをして跳び箱についた僕の右腕は、力が入らず手をついて踏ん張る事が出来なかった。学校の先生に病院に行く様にすすめられ、検査をした結果

は、『顔面甲肩上腕型筋ジストロフィー』。だが、まだ幼かった頃の僕は、それがどんな病気なのかなんて、まだ解らずにいた。

中学生になると、僕は皆不良になると思っていた。親や先生に対してつっぱった態度をとり、無免許でバイクに乗ってみたり、時に警察の世話になる事さえあった。

それから数年経ったある日、母が突然家から姿を消した。それは僕が一五歳、弟が小学校六年生の時だった。僕はともかく、幼い弟を置いて出て行った母を、僕はその時許す事はどうしても出来なかった。そして僕は、圭という名前の由来、清く正しくたくましく、素直で良い子に育つ様に、とは全く別の道をしばらく歩いていく事となる。

定時制高校に通っていた頃の僕は、特に勉強する訳でも無く、ただただその日その日を暮らしていた。

僕はバイクに乗る事が好きで、しかも運良く僕の病気は進行が遅いらしく、まだ生活の上で多少腕や足に違和感を感じる程度で、むしろ病気だという事を忘れさえする程度だった。ちょっぴりつっぱっていた僕は、暴走族に入った。大好きなバイクに乗るのはとても楽しかった。広い道路を我がもの顔で占拠し、大きな音を出して走る。それは僕にとって、とてもすがすがしく気持ちが良かった。バイクで走っている時は、嫌な事を全て忘れられたんだ。しかし、暴走族というのは、それだけでは無かった。恐喝、窃盗、傷害、放火、そして薬物にまで手を出し、無意味な暴力さえ受けた。だが今思うと、僕はその世界に全くと言って良い程向いていなかったと思う。

でも、あの頃の僕は、それを言われたままに行しか無く、僕の居場所はそこにしか無かったんだ。そして、そこで僕に残されたものは、後悔の二文字だった。

一方、家庭では母の家出が原因で父は荒れ、僕は外でフラフラし、家に残された弟。三人での暮らしは、決して暖かい家庭と言えるものでは無く、弟には本当に可哀想な想いをさせた。

しかし、バイクを通して沢山の仲間が出来、絆を手に入れた。だが、その時はまだその絆が一瞬で消えてしまう事があるなんて、思ってもいなかった。

バイクに乗り始めて数年、ハンドルを握る手に違和感を感じる。グリップを握ったまま、クラッチを握ろうとすると手が開きずらくなっていた。僕の知らぬ間に病気は着々と進行し、病気は僕から大好きなバイクも奪っていった。

そんなある日、母が突然家に帰って来た。今迄許せないでいた僕は、正直何しに帰って来たんだ、と思った。母は、祖父に家に帰る様説得され、帰って来た様で祖父は母に、

「子供には、母親が必要だ。」

と言ったらしい。だが、僕にとっては8年も家を開けていて、今更遅いと思っていた。それ以降母親とは、ちょっとした事でも口論になり、うっとうしいとさえ思う事も多かった。

四年前、徐々に病気は僕から自由を奪い始め、歩く事が困難になってきた。右足をひきずる様にして歩く為、腰に負担がかかり、腰の筋肉が刺激され、痛みを伴う。その為医者に、

「嫌かもしれないけど、移動は車椅子でした方が良いでしょう。」

と言われた。そして立つ事さえ困難になり、僕は立って歩く事をやめ、その一年後、立って歩きたくとも歩けない体になっていた。その時僕は、この病気の大きさに改めて気付くと共に、この先僕が歩んでいく道に対する恐怖感と、何も出来なくなるのだろうという、絶望感に押し潰されそうになっていた。そして僕は、死への恐怖を感じずにはいられなかった。しばらく僕は車椅子には乗らなかった。何故なら、周りの人の目が気になってしまったから。

こうして身内に障害者がいる事で、家族が世間体を気にし始めたのも事実で、僕はそれでも親や親戚はせめても味方になってくれると思っていた。だが母親は、

「家に友達が来るから、どこかに行け。」

と言い、遊びに出掛けた祖父母の家では、祖母に

「客が来てるから、圭は車から降ろすな。」

と言われ、親族の結婚式には僕だけ呼ばれず、僕は結局障害を持った事により、存在自体を隠され、邪魔もの扱いされる様になっていた。母親には、

「動けなくなったら、誰が面倒見るんだ。」

と常日頃言われ続け、こんな事ならいっその事、死んでしまった方が楽だとさえ思ったりもした。

しかし、勇気という言葉を使うのが正しいかどうかわからないが、死ぬ勇気も無かった僕は、逆に今自分が出来る精一杯の事をやろうと思った。まず僕の目標は、一人暮らしをする事。その為には、一人で動けなければと、重たい腰をあげ車椅子に乗る事にした。そうするしか無いと思っ

たんだ。だが、車椅子で走る僕の横を、小学生が颯爽と抜いて行った時、それはそれで屈辱的だった。その後、念願が叶い、僕は横浜で一人暮らしを始めた。友達が近くにいて支えてくれた事も有り、とても楽しい日々だった。しかし、その生活は長くは続かなかった。何故なら申請した生活保護が通らなかったからだ。何故通らなかったかと言うと、僕の貯金が問題だったらしい。しかし、その貯金も微々たるもので、これから一人暮らしをするに当たっての、家賃・食費・光熱費等を考え貯金し、尚かつあっという間に無くなってしまう程度の金額だった。だが、行政にはそれは理解されず、あげくの果てには、

「横浜に何しに来たんですか？」

と迄、言われてしまった。そして僕の楽しかった一人暮らしの生活は、行政という壁に阻まれ、二ヶ月で終わってしまった。しかし、二ヶ月という短い生活だったが、その際友達が皆助けてくれ、感謝する事が多い日々で、充実し貴重な経験になったと思う。今回の事で世の中というものを見つめ直すと、確かに昔よりはバリアフリーや障害者用のトイレがついている所が多かったりと、障害者の事を考えて作られている所も多い。しかし実際は、バリアフリーも角度がきつく昇る事が出来なかったり、とある駅では駅員の介助を必要とすると、忙しい時間は避けて欲しいと言われた人がいたり、役所での対応も良い加減な事が多く、まだまだ住みやすい世の中になるには、程遠いと感じている。車椅子での走行も危険が多く、僕は道路の凹みに車輪をとられ、転倒した事もあった。普通の人にとっては小さな水溜まりの様な凹みも、僕にとっては海の様に大き

な凹みなんだと、その時改めて実感すると共に、一人での車椅子の走行が少し怖くなってしまった。でも、僕の足は車椅子しか無く、僕が気をつけるしか無いんだ。

地元に帰って来てからも、友達には支えられる事が多く家族よりも友達の方が僕の事を考え心配してくれる人が多かった。僕が歩けなくなり、中には離れていってしまう人もいた。しかし皆が皆そうでは無く、昔と変わらぬ付き合いをしてくれる友達も多い。普通に電話をし、普通に遊びに誘ってくれる。嫌な顔一つせずに僕をおぶって、移動してくれる。そんな友達を僕は心から大切に想う様になった。

そんなある日訃報が届く。横浜で毎日の様に遊び、世話になった七つ下の友達が二十一歳という若さで、この世を旅立った。その日の二日前、僕は産まれて初めてのしゃぶしゃぶを皆で食べた。彼もその中にいて、彼が死ぬほど辛い悩みを抱えているなんて、微塵も感じなかった。何故その時気付いてやれなかったのか、今となってはすごく悔しくてならない。

そしてその一ヶ月後、又しても訃報が届く。今度は三つ下の友達が二十五歳という若さでこの世を旅立つ。彼とは地元も近く、よく遊び僕に『圭坊』というあだ名をつけた面白い奴だった。

二人は何を苦にして自殺という道を選んだのか、それは僕には解らなかった。誰だって、一度は死を考えた事もあるだろうが、辛くても生きていれば何か良い事はある。そう思って皆生きているのでは無いかと思う。何故なら僕もその内の一人だから。死ぬのは簡単で、生きていく事の方が辛いとよく聞くが、でも彼らがその道を選んだ事は、正気じゃなかったのかもしれないが、

死ぬ程辛い何かを若い彼らは背負ってしまったのかもしれない。

今、いじめ等によって、自殺をする若者が後をたたない。だが、そういったいじめによる自殺は今も昔も変わらずに起こっている事だと思う。しかし僕は最近のいじめというものはとても悪質の様に感じてならない。僕も心無い人にサイトに悪口を書き込まれ、すごく不快だった。いじめる人というのは、弱い人間なんだと僕は思う。人の心の痛みが解らず、いじめる事によって、自分が上に立った気分でいるのだ。周りも結局は自分が標的にならない為に、一緒になっていじめをし、自分の身を守っているのだ。いじめを見たら見て見ぬフリをせず、助けなければならない。それは確かに正しい事だが、実際その立場になったら、なかなか難しい事だと思う。だが、いじめた人というのは、後になって絶対に後悔すると僕は思う。そして、そんな簡単な事では無いかもしれないが、僕は思いやりの心というのを大切にするべきだと思う。誰に対しても思いやれる気持ちがあれば、自分のした事によって、相手がどういう気分になるのかという事が、少しは解るのではないかと思う。だが、いじめというのは若い世代だけでは無く、大人達の中にも有り得る事だと思う。そして今、多く騒がれているいじめに伴う自殺。自分を殺すと書いて『自殺』。病気を持つ僕等にとっては、命というのはとても尊いものだ。だからこそ、いじめが理由で自ら命を絶とうと考えるのは、すごく哀しい。いじめが理由の自殺だけで無く、自殺を考える人達全てに、僕は言いたい。簡単に出来る事では無いかもしれないが、自殺をする前にもう一度、周りにいて自分を支えてくれる人達を思い出し、寄り掛かってみて欲しいと思う。何故なら僕は、友

達の自殺でそう思ったからだ。そして、いじめる側の人間も行った事は後になって、必ず自分に帰ってくるという事を忘れないで欲しい。そして今の若者は、もっと広い心を持ち人の立場に立って、考えられる事の出来る大人になってもらいたいと思う。

二十九歳になった今、周りは結婚し子供が出来、落ち着いていく中で、僕はどんどん取り残されていく気がしていた。そんなある日、僕は彼女と出逢った。彼女とは出逢ってすぐに恋に落ちた。だが彼女には夫がいた。一度は諦め様ともしたが、諦める事は出来なかった。僕は彼女に猛アタックをし、結果彼女は僕を選んでくれた。彼女とは、僕が行った事の無い色々な所へ出掛けたり、今迄の事、将来の事、沢山話しをした。僕の生活は、彼女と出逢った事で一変した。今迄は何もかも投げやりになっていたのだが、彼女と付き合う様になり、健康を考え、諦めていた結婚も現実的に考える様になった。彼女の様な女性には、今後二度と出逢える事は無いだろう。

こんな僕の様な障害者と付き合ってくれて、本当に感謝している。これから先、どちらかが死んでいなくなるその日まで、二人仲良く、ずっと一緒にいたい。いつか誓った『永遠』という二文字。そして『相思相愛』という言葉を大事にしていこうと思う。そしてこれから、沢山の想い出を彼女と二人で作っていきたいと思う。

今僕は、とても楽しい毎日を送っている。バイクの話しをしたり、遊びに連れて行ってくれる友達がいて、優しく支えてくれる彼女がいる。そして、口喧嘩をしながらも、僕の事を心配し、見守ってくれる母、弟夫婦にかわいい姪っ子。沢山の人達が僕の周りにいて、支えてくれている。

絆というのは作ろうとして作れるものでは無く、自然に出来るものだと僕は思う。だからこそ、僕の周りにいて深い絆で結ばれた人達との絆は、絶対に切れない様、僕は強くほどけない様に結んでおくんだ。

車椅子に乗って見る視線は、低い位置にあるけれど、僕の視線はもう低い位置には無い。しっかりと上を見て歩いていくんだ。

そして、僕と同じ様な障害を持った人達も、夢を持ち病気や世の中に負けずに頑張って欲しいと、僕は思う。